

宮嶋 弘先生の思い出

月 溪 宏

昭和二十四年、夏季文芸講座が開かれるのを知つて、同僚二人を強引に誘つて殊勝に聴講したことがあつた。しかし、性来の横着でノートをとるでなし、パンフレットを保存するでなしの私だから、その時初めてお顔をみた宮嶋先生の演題すらも忘れてしまつてい

る。ただ、講演が始まるや、やたらに耳につくのが、先生の「そこでですな」「……：こうこうなんですな」と演発される終助詞「な」である。早口の上に、強い関西アクセントで発音される先生の「な」は、常に「なア」に近く、粘着力のある入念と強い詠嘆とが共存していた。そしてしかも、この「なア」が聴衆の共感を喚起することなしに、自分だけの世界で、自分に語りかけているような孤独の響きを伴つていたものだつた。

今となつて思えば、こういう孤独というか孤絶というか、先生のような「なア」を発する人に接した経験はない。年も若く、茶目だ

つた私は、講演の中味をそつちのけにして、早速、ポケットの手帖に正の字をつくつて、先生の「なア」を勘定したものだつた。二時間足らずのお話しに、なんと八十七回の「なア」が発音され、講演終了後、同僚から苦笑の一発を背中にくらつた思い出もなつかしい。演題も忘れ、ノートも残つていないのに、このいたずら書きをした教員手帖が、今だに残つているのは皮肉である。だが、この時が私の先生との出会いなのである。

二十五年、私は文学部に編入し、奇しくも先生の聲咳に接することになつた。怠惰な生徒であつたが、先生の授業は割り合いサボらなかつたように思う。黒板にいきなり「春すぎて——」の万葉歌を書かれ、成分分解をせよと指名され、教壇でドギマギした思い出も今はなつかしい。論文審査の時、私が部屋へ足を踏み入れるなり「君は学問と科学の違いをどう思うのか」とやられ、目を白黒させたこともある。とにかく、先生は暴れ馬のような私を調教する術を心得ておられたようである。私は、先生の飛躍の多い、啓示的な御発言にすつかり鼻づらをつかまれ、ひきずりまわされて四年の月日を過したわけだ。

二十七年に入つた大学院を仕事の都合で中断し、三十年に再び顔を出した時、教室へ入つてこられた先生が私を見付けられるなり、「一人では勉強できんかな」とニッと笑われた、あの温顔を、私は忘れない。

「ベルグソンを読むですな。」——五条坂の御宅で、和服姿も細やかであつた先生のお言葉は今だに私の重荷となつて残つている。大学院をはなれてからも、実は、私はまだベルグソンを理解できないでいる。一体、私がやろうとした言語の学的方法論の基礎的理論にベルグソンがどういふ影を落とすというのであろうか。「まだ、わからんでしような」地下で、先生はきつと笑つておいでになるに違いない。まことに無念なことである。合掌。
(三三年大学院修了、紫野高校)

「韻鏡」のことなど

真 鍋 昌 弘

「韻鏡」をとりあげてお話し下さつたのがおとどし、そして三十七年度はずつとおやすみになり、今年の四月から「懐風藻」の話をはじめられていました。お元気にいられてい